

令和 3年 1月 21日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号
氏 名

賀川 恵理香

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

- 1 派遣先:都市名 ラーホール (国名 パキスタン・イスラーム共和国)
- 2 研究課題名 (和文) : 現代パキスタンにおける女性たちのパルダ実践—都市／農村の比較—
- 3 派遣期間: 令和 2年 1月 22日～ 令和 2年 12月 12日 (326日間)
- 4 受入機関名・部局名: ラーホール経営科学大学

5 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

【派遣先で従事した研究内容】

本研究は、都市と農村を横断する女性たちのパルダ実践を明らかにすることを目的としている。パルダ (pardah) とは、南アジア地域に広く存在する性別規範のことであり、狭義には女性のヴェール着用、広義には男女の生活空間の分離を指す。

2020年1月22日から約11ヶ月間、パキスタン、パンジャーブ州ナーローワール県の農村を拠点として、農村部における女性たちのパルダ実践に関する参与観察及びインタビュー調査を実施した。調査にあたっては、空き家の一室を借りて村内に住み、住民たちとの関係性を構築した。そのうえで、調査村の住民・世帯データを収集し、全103世帯の女性メンバー、男性メンバーそれぞれにパルダに関する半構造化インタビューを行なった。さらに、調査村から都市部の大学へ進学した女性たちに着目し、出身村と進学先の都市での振る舞いの違いについて調べた。

【研究状況】

聞き取り調査の結果から、以下の示唆が得られた。

- ① パルダの解釈方法には、年齢、性別、カースト、経済状況、教育的バックグラウンドなどの様々な要素が関係していること
- ② 農村部と都市部におけるパルダ実践には、一人の女性においても差異があるということ
- ③ 調査村におけるパルダの実践方法には、装いの方法、振る舞いの方法の両方において時代的な変遷があること
- ④ パルダ実践におけるヴェールの形状の変化には、調査村の周辺都市との交流が背景となっていること

6 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

【研究成果発表等の見通し】

- ・ 2021年3月に学術誌『アジア・アフリカ地域研究』への論文投稿
→パルダの解釈方法の違い(上述の①の内容)についての論文を執筆する(現在執筆中)
- ・ 2021年8月に日本南アジア学会誌『南アジア研究』への論文投稿
→農村部と都市部のパルダ実践の差異(上述の②の内容)についての論文を執筆する
- ・ 2021年10月に開催予定の日本南アジア学会第34回全国大会における発表
→調査村におけるパルダ実践の時代的な変遷及び、都市との連関(上述の③、④の内容)について発表する

【今後の研究計画の方向性】

今後の研究においては、現地で収集したインタビュー資料や文献資料を整理し、論文投稿や研究発表においてデータを活用することができるようにする。データ整理を進めるうえで、追加のデータが必要なことが判明した場合、Whatsappなどのアプリケーションを利用し、オンラインでの聞き取り調査も予定している。来年度は、上述のように研究発表を重ねるとともに、博士論文の執筆を進め、11月に所属先の京都大学に博士論文を提出することを目指す。

7 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

報告者は学部時代から博士課程の現在に至るまで、パキスタンに度々足を運んできたが、農村部に長期で滞在した経験はない。今回本プログラムの支援を受けて、約1年間農村部に腰を据えて研究活動を行うことができたことによって、様々な成果が得られた。以下ではそのうち3つを記したい。

【パンジャービー語の会話能力の向上】

報告者は、学部時代の留学によって既にパキスタンの国語であるウルドゥー語を習得していたが、今回の農村滞在によって、パンジャーブ州の地域語であるパンジャービー語を新たに学ぶ機会を得た。特に、パンジャービー母語話者がほとんどである調査村内において、パンジャービー語を日常的に用いることによって、住民とのコミュニケーションを円滑に進めることができた。さらに、パンジャービー語でのインタビュー調査を行ったため、ウルドゥー語を解さない高齢女性や高齢男性からも聞き取りを行うことが可能であった。

【パキスタン農村部における滞在経験の獲得】

先述の通り、これまで報告者は主にパキスタン都市部における調査を行っていたため、農村部における調査経験はない。今回の長期滞在においては、村落部における人々の生活実践をはじめとして、村内で起こる揉め事やその解決方法、そして、パルダの実践と実際の生活の結びつきなど、様々なレベルの物事を内側から見つめることができた。報告者は村内に住み込んでいたため、住民たちとの直接的なコミュニケーションを取ることが可能であり、そこで得られたネットワークは何事にも変えがたい。

【パキスタン人研究者との繋がり構築】

今回の滞在においては、受け入れ教員であるラーホール経営科学大学のFurrukh A. Khan准教授に大変ご助力いただいた。Furrukh先生からは、パキスタン国内において、ヴェール研究の分野で先導的な研究を行う研究者であるNida Kirmani先生や、Anjum Alvi先生をご紹介いただき、報告者自身の研究に関して、様々な知見を得ることができた。加えて、パキスタンにおけるパルダ研究者である、Haque Riffat先生とも繋がりを持つ機会を得た。今後の研究活動においては、今回得ることができた人的ネットワークを活かし、所属大学院の国際研究発信力強化プログラムを活用し、オンラインにおいて国際的な研究集会を主催することを予定している。